

先人たちの声

北九州モデル導入の**実際**を聞きました

社会福祉法人薫会 特別養護老人ホーム

北九州シティホーム 絆館 入所21名
北九州市小倉北区萩崎町1-32

平成27年4月に開設。小倉北区と小倉南区を中心に、北九州全域で高齢者福祉事業を展開している。



北九州モデル導入の主な取組内容

- ・北九州市介護ロボット等導入支援・普及促進センター（以下、センター）実施の業務量調査とその報告を受け、主に**記録業務の効率化**を課題として掲げ、センターの助言を交えながら具体的な取組内容を計画。
- ・記録業務については、センターによる仲介の下、記録ソフトメーカーとの意見交換を実施し、**記録ソフトの機能活用拡大**を進めた。その結果、**活用していなかった機能を再認識でき、更なる活用が図られたことで記録時間を削減**できた。
- ・入浴業務については、**身体的負担軽減を目的に、脱衣所の環境設定について検討**した。その結果、簡易ベッドの導入に向けた**情報整理**ができた。

北九州モデル導入の流れ (センターによる伴走支援)

		R4						R5			
		6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
準備	キックオフミーティングと今後の流れの共有										
調査	センターによる業務量調査と結果報告会										
検討	課題抽出と解決策立案に向けた意見交換										
実践	センター仲介によるメーカーとの意見交換/振り返り										



1 北九州モデルに取り組もうと思ったきっかけは？

人材不足により職員の負担が増えており、その打開策として介護ロボットの導入を考えていました。しかし、現場に適した介護ロボットの選定が思うように進まず、何も変わらない状況でした。そんな折、北九州モデル導入の話があり、これを機に**適切な介護ロボットの導入と業務の見直し**を行おうと思い、取り組みに参加することにしました。

5 取組にあたり壁になったことは？

感染症の流行や調査の遅れなどにより**次の取組が後ろ倒しになったり、滞ることで期間が空いてしまい、職員のモチベーションや目的意識が低下する**事態が生じました。そのため、その都度**状況説明を詳しく行い、取組によって得られる結果を明示し続ける**ことでモチベーションの維持を図っていきました。

2 職員との合意形成はどのように行いましたか？

キックオフミーティングといった、**最初の話し合いの「場」から、できるだけ多くの職員に参加してもらい、北九州モデル導入の目的やその取組について理解と共有**を促すことで、合意形成を図っていきました。また、**日々のミーティングでも取組の詳細などを具体的に発信したり、話し合いを行う**ことで全員の意識を高めることができました。

6 今回の取組で役に立ったことは？

業務の見える化により、**職員自らが業務を細分化し、整理する視点を持つ**ことができるようになりました。また、これまで「どうにもならない」と諦めていたことも、**解決策を柔軟に考えられるようになり**ました。そして、解決策をどう実行していくか、**現場自ら積極的に取り組むようになり、現場の意識改革**に大いに役立ちました。

3 多職種をどう巻き込みましたか？

夜勤者以外が参加するユニット会議（毎月開催）や毎朝行われる職員ミーティングの場で北九州モデル導入の取組について説明を行っていきました。これにより、介護福祉士、看護師、機能訓練指導員、相談員、介護支援専門員、栄養士、管理者といった多職種が連携し、取組を進めていくことができました。

7 新たな取組など、今後の方針は？

職員間コミュニケーションの円滑化を図るため、**インカムアプリを導入**する予定です。また、職員の身体的負担の軽減に向けた**移乗支援機器の導入や技術の更新**も計画しています。さらに、入居者の状態をリアルタイムに把握できる**見守り支援機器を導入・活用し、看取りケアの充実**も図っていく方針です。

4 不平不満が出たとき、どのように対応しましたか？

これまでの業務に加えて、**業務量調査や話し合いなどによって忙しさが増し、ストレスを示す職員**もいました。その都度、「**人手不足による負担を減らし、ケアを充実させる**」という目的と、「**時間的・精神的なゆとりを生み出す**」という到達点を示したり、取組の主要メンバーが中心となって**職員の意見を傾聴**することでフォローしていきました。

8 これから取り組む施設へのアドバイスを！

取組を開始するにあたり、**これから何をどう進めていくのか、最後までの流れを明示**することで、新たなこと/未知なことに対する**現場の不安が払拭**され、積極的な活動へとつながると思います。そして、取組を進める上で現場に負荷がかかることがあるため、**職種の垣根を越えて互いにフォローし、精神面をサポート**しつつ取り組んでください。